

⑥ 観察年月日 昭和三十六年二月二〇日—二五日

⑦ 観察者 第一報告と同じ

III 結果とその考察

結果については、以下の3点を中心にして整理した。即ち、成功に要した時間、成功までに要した誤った試行の回数、成功までに要した誤った試行の支点からの長さである。(結果の表は省略する。——日本保育学会第一四回大会発表抄録集82~83頁参照)

結果をまとめてみると以下のである。

① 全般的にみて、幼児はある程度の法則の認識をしているのではないかと思われる。

② これを上・中・下の三群にわけてみると、傾向としては、成功に要した時間、成功までに要した誤った回数——試行錯誤の回数といってもよいと思われる——とも、上位群が下位群に対して優位であり、各群のなかでは、男児が女児に対して優位である。

③ そして、時間、回数についての分散は、下位群になるほど大きくなっている。

④ これらのことは、第一報告で報告した結果と同様であり、——常識的ではあるが、——上位群ほど見透し(Insight)をもった行動ができ、下位群になるほど試行錯誤的な行動が多いということを示しているようし、

⑤ 法則理解の程度も、ある程度数量的に握めるような気もする。

⑥ しかし、一つの先行の試行が、あとの試行をする場合に——とくに支点からの荷重点、力点への長さの比が(1:1)を除く他は、(1:2)と(2:1)などのように、支点からの荷重点と力点および荷重との関係が逆になっているのであるが——その間に転移があまり認められないことや、

⑦ 成功のためには、偶然の契機がある程度試行に影響を与えていることは、この研究における一つの大きな問題を残している。

⑧ そして傾向としては、(3:1)の試行がとくに困難を示しているようである。またこの試行の先行の試行の(1:1)の試行、および、(1:4)、(1:1)の試行がこれにつぐようである。これらの試行の間の相互関係については、今後の研究で明らかにしなければならない。

⑨ なお、誤った試行回数の分布についての χ^2 検定の結果は、上位群の男児を除いて、他はほとんどその差異が認められなかった。

——危険率5%水準において——

IV 残された問題

この研究には多くの残された問題があるが、とくに大切なのは以下のようである。

① ここに示した結果を一層明瞭にするために、偶然の契機が入らないように、試行の条件をもっと整理した形で追試をする必要がある。

② また、ここにとりあげなかった他の事象においても、いろいろの問題があると思われるので、これらについても明らかにしていかなければならない。

(大会抄録80~83頁)

積木遊びにおける幼児集団の比較

(その五)

東京・関屋幼稚園 清水 エミ子

目的 入園して来た子の多くが非常に追従的に交っている

のが目立った。そしてその追従の傾向に差のあることがわかり、積木遊びにも差があらわれていたので、今までの研究を基に追従的幼児の積木遊びを比較観察し、かたよりのない社会性を身につけたい。

方法 昨年と同じ自由遊びの積木を(課題七月船、九月家、十一月自動車、十二月タンク、一月軍かん、二月宝島)をあたえ)観察記録した。グループは意図的に構成せず対象の男一四名女一〇名をマージしておくだけで自由に積木遊びをさせ比較した。

考察 追従する子どもたちについて

① 追従の仕方と原因を比較する

② 遊びへの参加の仕方を比較する

③ 構成及び交友関係を比較する

(くわしくは一四回大発表論文抄録集表①を参照されたい)

結果 ① 追従の仕方と原因。自然発生的に遊んでいても、

いつのまにか二つの群に分れて積木している。その一つは、言語グループ。ことばで(理屈)指図してくれる子に追従する子どもたちで、もう一つは行動グループ。体で(実行しながら)指図してくれる子に追従する子どもたちであることがわかった。その上男児は自分の劣っている面をおぎなってくれる子に追従し、女児は自分と同じ傾向の子どもたちに追従することがわかった。(この研究で追従される子のボス化に注意してきたが、私の学級がドングリの背くらべの学級だったためか心配はなかった。)

② 遊びへの参加の仕方(くわしくは抄録の②表参照)

「言語」「行動」いずれのグループも同じ傾向のようだった。

I 友だちの指図で参加する者

① 全然指図がないと参加できない子(ことば及び行動で何をど

うしろという全面的指図)

⑥ 具体的な構成、遊び方の指図で参加していく子(ここんとこのんだよ、とちょっとした指図)

⑦ なんとなくそばにいてさそわれて参加する子。

II 自分の意見を持っていて友だちの影響で参加していく者

① 自分の意見に合った遊びにさそわれて、(ぼくもこうやろうと思っただ、と言いながら)

② 人の意見に自分の意見を合せて参加する。(こここうするって言ったからぼくもこうやる)

③ 人の遊びにあこがれを持って参加する。(ウワー素敵、ぼくもやりたい、入れて)といったような差のあることがわかった。

これは今までの研究(内向・外向的な子の比較、ボス的な子の比較の時)には見られなかった弱い消極的な参加の仕方であるようだ。

④ 構成のちがいと交友関係

I 構成のちがいがい

言語、行動のどちらのグループも一年間を通し課題が違っているにもかかわらず構成の変化がとほしく同傾向のようだ。また、内向的・外向的な幼児の研究の時の構成の仕方に似ているようだ。言語的なものに追従する子の構成は中に入りこめるようにまわりを高くかこい、屋根までつけている(内向的幼児に似ている構成)。行動的なものに追従する子の構成は、外向でテッポウ、エントツ、アンテナなどがつき開放的な構成(外向的幼児に似ている構成)。

今年是非常に両グループ共平凡な構成であったが、そぼくなくかれた遊びをしていることを発見した。男児は一ヶの積木に腹ばい、飛行機、三ヶ位かさねてスクーター、ロケットなどに仕立て、女児はタンクス、ハンドバック、乳母車などにしている。これは今年の特

徴だと思われる。

II 交友関係のちがい

いずれのグループも、追従される子（この遊びではリーダー的な子）が一人でなく数人いること、そしてその追従される子と追従する子のつながりはあるが、追従されるもの同志の結びつきが少ないことが目立った。

言語グループは行動グループより弱く結びついており、行動グループはやや一人の追従される者にまとまって結びつきがあったようだが、いずれも交りの広がりには小さくむらがあった。これは追従的幼児の交友関係の特徴ではないかと思われる。

しかし二期終ごろより積木の場では自分の意見が持て自分を主張できるようになり、追従するもの、されるものも、一つになって遊べるようになった。

これは抵抗の少ない積木遊びが媒介になったからだと思われる。

指 導 追従的な幼児は、追従していても不満でなく、たの

しんでいるというところは見のがせない。その上自信がなく消極的で劣等感を持っていると思われる。そこで、

追従的な幼児集団の積木あそびは上手な指導、誘導が特に必要であり、指導に乗ってくる時期を注意ぶかくみきわめなければならぬ。

追従的幼児も指導に乗って来る時期もあった（一月中旬頃）が貧弱だった。

今までの外向内向、ボス的な幼児の研究の時のように能力に差のある子の指導は時と場をまちがえなければかなりの指導は成功したが、追従的な子は、強い指導では遊びがかえってこわれてしまい弱すぎて効果がないとゆうことを一年間の研究で何回も味わった。

そこで

追従的なグループ集団の子どもたちは注意ぶかく、たんねんに指導し指導にのるときを適かくにつかまえないければならぬと強く感じた。指導さえまちがえなければ今までの研究の内向的な子、外向的な子、ボス的な子の、リーダーより、追従的な幼児の方が、非常によいリーダーになれる、民主的なリーダーになれる子どもたちだと強く感じた。

積木での交りが、そのまま他の活動にも適用できたのは今年の追従的な幼児たちで、今までにないすなおな友だちのうけ入れ方をしていたと思う。

この追従的な幼児の積木遊び及び、他の活動をしっかりとみつめ（科学的に）積極的、民主的リーダーになれる子にしていきたいと考える。（大会抄録84～90頁）

社会性の過成熟児と

未発達児の比較研究

神戸市立垂水幼稚園	陸 井 陽 子
魚崎幼稚園	井 藤 尚
西郷幼稚園	奈 良 欣 子
島 崎 公 子	島 崎 公 子

研究のねらい

幼児教育の重要な目標のひとつに、社会性を養うことがあげられるがこの目標を達成するためには、その対象である幼児の社会性発達の実態を把握することが必要であることはいうまでもない。幼児